

もっと大きなスイカを作りたい！

この事例は、「4歳児の時に、スイカを種から育て、収穫の喜びを味わった子どもたちが5歳児となり、スイカの種への興味を深めた体験が、さらに他の種へと興味を広げ、探究へと繋がっていく」実践です。保育者は、子どもたちの興味・関心を捉え、思いを理解し、子どもたちの力で実現できるように環境作りを工夫しています。また、子どもたちの体験内容を保護者に伝える情報発信の工夫により、園での子どもたちの姿が伝わり、「科学する心」の理解を家庭とも共有しています。また、子どもたちの興味は保護者にも受け止められ、家庭生活と園生活が繋がって、体験が豊かになったことが読み取れます。

南陽市立赤湯幼稚園

5歳児

子どもたちは、4歳児の時に、種からスイカを育てた。5歳児になり、クラス替えになったが、植物に触れる活動は続いていた。5月に、子どもたちからスイカの種の話が出始めた。「家でスイカを食べたら、種を持ってきたい」と言う子どもたちの声を、クラスのみんなに伝え、「いいよ！」と賛成してくれた。

場面1：スイカの種を蒔こう！

<5月下旬>

- ・偶然、2人一緒にスイカの種を持ってきた。家庭で、子どもたちの「やってみたい！」気持ちに応えてくださったおかげである。
- ・子どもたちはいつものようにガラスの瓶に水を入れ、種を入れた。「**浮く種**」と「**沈む種**」を調べるためだった。
「**やっぱり！浮く種と沈む種があるよ！**」
何度も経験している子どもたちは、そうなることを予測できていた。保育者は、子どもたちが**自ら調べたり、考えを伝え合ったりする姿**を大切に见守った。
- ・スイカの種に心を寄り添わせ、みんなで世話ができるように種を蒔く。
子どもたちは、「スイカの芽、出てきてね」と、**スイカの種に声を掛けながら蒔く。**



場面2：発芽への期待

- ・スイカの種の生長に期待が膨らみ、関心が高まるよう、昨年と同じ絵本『スイカのたね』（作・絵：さとうわきこ / 出版社：福音館）を読み聞かせた。同じ絵本を読み、昨年から今年度へ、スイカ栽培の活動を繋いだ。**自分たちが蒔いたスイカの種と、絵本のストーリーが重なり、さらに関心をもって絵本の世界を楽しむことができた。**
- ・**土と水の栄養によって芽が出ることを、子どもたちは体験の積み重ねから学んでいて、自分たちで考えて世話をする。**自分のだけでなく、みんなの種の生長も楽しみにする。みんなで小さな種の世話をし、“自分たち”の心が育まれている。
- ・保育者は見守り、水やりをしている子どもたちの姿を認める声がけをして、植物への思いやりの心と、スイカ栽培への期待を育むようにする。



場面3：ぐんぐん生長するスイカの芽

<6月上旬>

- ・保育者は、スイカの芽が出ていることに驚く。「だって、ちゃんと水かけてたもん！」とTさん、Kさんが自信满满で答える。
- ・「**沈んだ種がやっぱり早く芽を出した！**」沈んだ種が早く芽を出すことを、何度も確かめてきた子どもたちは、予想をしていたようだ。

<6月中旬>

- ・ぐんぐん生長するスイカの芽。**葉に種が付いているものといないものがあり、違いを発見する。**
Tさん：「分かった！葉っぱが開いていると種は付いていない！」と自分の考えを伝える。子どもたちは**様々な事象に対し、推測することが多くなった。**
Tさんのひらめきを聞き、さらに観察し、納得したり、「**本当かなー？**」と思いを巡らしたりしていた。



- ・昨年の経験から、**小さなペットボトルの容器のままでは、大きなスイカが作れないと考えた子どもたちは、昨年と同じ「スイカの畑」に植え替えることにする。**チームのペットボトルを大切に抱えて畑へ！
- ・細い苗を大切に両手で持ちながら、畑に植え替えた。
「**大きいスイカになってね！**」
子どもたちは、**植え替えてからもスイカに思いを寄せ、水やりや草刈りを進んでやる。**
- ・“ばばあちゃん大作戦”への期待が感じられる。



場面4：他の種に興味広がる！

<6月上旬>

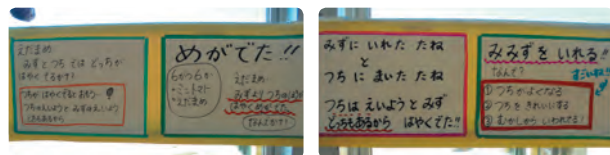
- ・クラスだよりでスイカの生長を伝えた翌日、Kさんが様々な種の入った袋を持って登園する。中にはパプリカ、ピーマン、ミニトマト、サクランボの小さな種が入っていた。Aさんは大豆の種を、Sさんはアボカドの種を持ってきた。
- ・早速、子どもたちは、**ペットボトルなどの容器を園内から探し、土を入れて蒔く準備**を始めた。
- ・保育者は、どうやって蒔くかをみんなで話し合う場面を作る。話し合いから、育てたい種を選んで蒔くことになった。
- ・**小さい種を心を込めて蒔く**。「楽しみだね！」と友達と顔を見合わせながら話している。水をかけて世話をする子どもたちは、**小さな芽が出るたびに一喜一憂する**。
- ・「そっちのチームの芽、早く出たね。いいなー。まだこっちは出ないんだよねー」「もっと水かけてあげないと、だめなんじゃない？」などと、**認め合い、自分の考えや知っていることを教え合う姿**が自然と表れる。



場面5：比べてみよう！

<6月中旬>

- ・昨年度の3歳児が、大豆を水に入れて発芽させたことを保育者が伝え、**「土と水どっちが早く芽を出すか」**比べることになった。
- Bさん：「**水より、土のほうが早く芽が出ると思うよ**」
- 保育者：「どうして？」などと、考えを引き出す。
- Bさん：「だって、水に入れたのは水の栄養だけなんだけど、**土に蒔けば、水と土の栄養が2つあるから早く出る**と思う」
- Cさん：「土にミミズ入れるといいんだよ！土をきれいにするし、土にいい！昔から言われている！」
- ・保育者は、子どもたちのひらめきや知識を伝える姿に驚かされ、感心して認める言葉をかける。
- ・大豆は、土に蒔いたのが芽を出した。水に入れたものはふやけて割れてしまった。**「水を毎日交換すればよかった」「水が多かったのかな」と振り返り、自分たちなりの考えを伝え合っていた。**



場面6：保護者にも芽生えた「科学する心」

- ・子どもたちが心を揺り動かし、夢中になって遊ぶ姿は、保育者の心も揺り動かす。このような子どもたちの生き生きとした姿を、クラスだよりや掲示を通して家庭に情報発信することを、保育者も楽しみながら積極的に行ったことが、家庭での話題作りや、保護者が保育への関心をより深めるきっかけにもなったと感じている。栽培や飼育活動を通して育みたい思いやりの心や、命に向き合う子どもたちの姿が伝わるように取り組んでいる。



スイカ作りについて発信。すると…様々な種への関心が生まれた。

【考察】 昨年のスイカ栽培の体験は、子どもたちの心を揺り動かし、「科学する心」が芽生え、今年度の「もっと！やってみたい！」の意欲に繋がったものと考えている。子どもたちの「やってみたい！」の気持ちに保育者が心を寄り添わせながら、ワクワクやドキドキを共感したことが、子どもたちの取り組みを支えた。子どもの柔軟な感性に触れるたびに、保育者も心を揺さぶられる体験となった。

昨年は、子どもたちの興味・関心を深めるために、担任が看板を作るなどの環境構成をおこなったが、5歳児に進級した子どもたちは、昨年の体験をもとにして考え、工夫し、「やってみよう！」とする主体的な姿が見られた。小さな種への関心と栽培の体験は、共に取り組む友達や、保育者や保護者の関わりによって、「科学する心」を大きく育んだものと考えられる。これからも自分の思いや考えを言葉で表現し、伝える喜びや、「すごい！不思議！」をクラスみんなで共有できる場面を作りながら、さらに「科学する心」を育むことに繋がっていきたい。